

わが日本構造論

群島の基盤の褶曲について③

別所 文 吉

第三章 岐山曲阜の章

① 調査の発足

初めて濃飛高原の旅に立ったのは たしか昭和5年4月のことであった。芦生の演習林で「揖斐川の水源に塚という部落があって 名の通り塚らしい小丘があった。発掘してもよいと思っている。いって見ないか」といわれたのが 直接の原因ではあったが それ以前 北海道にいたころから 日本の国の中でもっとも日本的な地方として 美濃飛驒の山々にあこがれていたのだから 地質調査だけが目的でなかったことだけははっきりしている。

揖斐川町の寒々とした木賃宿を出て 新緑の峡谷を一人で遡って 道が新樹のトンネル中に入ると 言いようのない孤独感に襲われ なにかこの旅の行く末が空しいものに思われるのだった。「死こそわが望むところである」といっても 文覚上人のようにそれを自ら求めて 修業するだけの勇気がない。唯それが向うから来る時に 避けぬだけのことである。広瀬から支流を分けて 夜叉ヶ池に上ってから門入に下った。この道筋で北に冠山の魁偉な頂をみて いままでと地質次元の違うものを感じた。徳山の領分である。ここから更に本流を遡って塚を通り 釈迦嶺のエリブソイドをめぐる 馬坂峠を越えて 根尾谷に入って 西谷川と東谷川との出合である樽見河原に泊った。垂水の宿は住吉屋といって 今西さんが面白い男といっていたのは宿を領っていた次男の徳松さんであった。徳松さんとはこの時 1カ月ほど生活しただけであったが この後40年に汎って兄事することになる縁ができた。徳松さんは鉄砲打であったから 根尾の山は知らぬところはなかったし 人間がしっかりしている上に お互に若くて 明るかったから 途方もないことを平気でしでかす共通したものがあつたからである。「中村先生はマメなのか」と 挨拶に来たのは徳松の母のおとく婆さんでこの時『元気ですよ 「根尾へ行ったら宜敷く伝えてくれ」と おっしゃっていましたよ』と私が柄にもない口当りのいいことを いったばっかりに 飛んでもないことになってしまった。というのは お徳婆さんは「宜敷く書いていましたよ」を この学生の「万事宜敷く頼みますぞ

ととってしまった 私の勉強素行など 一切のことにつき 中村先生の代りに監督することとなって 監督の仕様は 三人の妻の息子達以上に 厳しいものになったからである。といっても一方宿代は只同様にしてくれたし 実の親以上に可愛がってくれたから ほんとうは迷惑ばかりでもなかった。中でも青春の挫折後の大きな空隙を 素朴な愛情を以て埋めてくれたのは 彼女であった。

この旅行で歩いたルートは 120kmに及んだが この間の露頭という露頭のディップ・ストライキを 一々測って5万分の1の図上に記入した。もちろんただ記入しただけで まとめようとしなないから 岐山曲阜というこの地方の地形と同様 何が何やら無茶苦茶であった。こんな無茶苦茶では 何ともしようがないものである。何もならないことに 血道をあげるところに 人間の余裕があろうというものだと 屁理窟をほざいているところへ中村先生が入ってきて 「どれ見せろ」ととり上げて 「しばらく借りてゆくよ」と もってゆかれた。後で聞けば加藤不二男助手に命ぜられて堪念に写された。その時は「いくら偉い人でも あんな無茶苦茶なものが判るのかなと思っていたが この後3年の学会で このディップ・ストライキに後で調べたものを加えて 発表せられたところを見ると あの無茶苦茶なディップ・ストライキを 自然の露頭として見ておられたのだ。自然の露頭ならば どんなものでも なおざりにせられなかったのであろうと いま考えている。もともと古生層のディップ・ストライキが無茶苦茶なのが しぜんで本実であり その無茶苦茶が初心者計ったものだけにかえてそこに本実のものを見出して居られたのかも知れない。この時 発表せられた地質図を先生は「根尾断層をめぐる岩層の配列図」とせられた。なぜ「地質図」とせられなかったのか 「地質図」の仲間に入れられなかったのかと ひそかに不満に思っていたが いま私はありきたりの「地質図」の仲間に入れるには あまりに正直で自然であったからではないかと 思っている。

それから1カ月もたたぬ内に 私は今度は本腰で 根尾谷に入った。濃尾地震の野外地質学的調査をやりかねて徳松兄から色んなことを習うために。だが徳松

は根尾を去っていた。長兄銀松が住吉屋を継いだからだ。私は落胆した。徳松から聞いていたビックリするような木地屋の娘たちや、1,000米級の稜線に柳ばかりが生えている天の河原というところなどを尋ねて北方営林省の関谷技師とともに松田部落の井上乙治郎さんの許に移った。木地屋の娘達には話ほど吃驚しなかったが天の河原はたしかに存在し伏流の響が尾根からきこえるところがあった。

その他カルスト地帯に特有なめずらしいものがみつかった外当時の石灰岩の常識に調和しない数々の新事実があることを知ったのである。石灰岩と輝緑凝灰岩をこの国の古生層のキイベッドとすることはすでに明治の中頃から心ある地質家によってはじめられている。そんなことはもちろん知らなかったが偶然調査はここから初められた。この時代石灰岩は大洋の中心一深い処で化学沈澱作用によって沈積したものとされているのにこの船伏山では無煙炭が石灰岩中にボナンザをなして胚胎し天の河原には屢々珪化木が見出される。これらの事実は石灰岩が大洋の真中の深海よりはむしろ大洋の中の浅処海底の礁一バリアーに堆積されたとするほうが自然ではないか。更にこれらを裏づけるように船伏山の龍ヶ洞から珊瑚の1m²大の黒い立派な化石が出たではないか。私はこれを龍ヶ洞のゴージャから自分で転がし自分で背負って住吉屋に持帰ったものを後で中村先生に乞われて京大博物館に贈った。又同じ処で得た菊花石の大輪はシャルルスタインの中の逸物であり(今日のグリーンロック中のもので)このシャルルスタインもまた大洋中の浅処一地背斜に噴出したものではないか。

根尾ではこういう岩層をひっくりめてハイセキ(灰石)という。ハイセキは火に逢って灰になるから縁起の悪いものとして家の中には入れない。灰石のあるところは樹が生えず岩クラスが多いので犬は登れないから猿がつくという。灰石の分布しているところは猿の領分であり猿の群の周遊するところである。私はひとりでロクとチョコという猿を追うことを覚えたばかりの2匹の犬を連れて灰石を追いかけることにした。灰石の領分は後に石灰岩層としずっと後に輝緑凝灰岩とをまとめてG層としたところのものである。これらの堆積物からなるバリアーは古生層が起上する時にこれらを支える支点となるものとして重要なものであることは後で説く。岩層の上を踏んで追いかけて作った地質図こそ信ぜられる本実にちかいものだということを中村先生から度々聞かされていたから

② 灰石層

船伏山・天の河原を発足したG層は稜線を伝って北上し能郷白山で花崗閃緑岩のプルトンに喰われるところでUターンするものようでこれから南下して水鳥谷の魚金山に至るまで稜線を伝って稜線を離れるということがない。この稜線の高さは1,000m±の準平原でカルスト地形を示しその間にモナドノックは存在しない。このストライク・サイドの分布は歩けば誰れにでもわかるがそのデュープサイドはそのセクションの構造はどうなっているであろうか。ライム石のセクションがどうなっているかほど難しいものはない。それを見違えているがためにこの国の古生層はいまだに解明せられていない。その見違えから小さくはライム石の埋蔵量の計算を間違えることが多い外大きくはこの国の古生層の根本である堆積・褶曲の問題が一向に進歩しないのである。

ライム石のセクションを考えるにあたって1つの露頭の観察やクリノメーターのみたよってはいけない。稜線を切る峡谷においてセクションの大勢を掴むこと稜線の麓におけるライム石以外の岩層とくに角岩の姿をみてこれとライム石の姿勢を比べて考えるべきである。もしライムストーン・ケープが存在すればケービングをやって洞窟の形体を求めれば万全である。

根尾谷のフィールドで私はライム石の稜線を切る横谷一大須川の黄檗小屋・矢谷の枝谷ハンバラ谷・シモツヤ谷中候・水鳥谷の支谷中又・橋立・主谷においてライム石のセクションがV字型またはU字型をなすことを知った。稜線の山腹や山麓にでている角岩層の追跡からライム石とホルンストーンとのバウンダリーが大体調和するかあるいは亜調和的であって両者の間には大きな喰違いがみられず両者はもともと同時異相の堆積であったものが起上の際異質のもの同志の岩層が変るゾーンにそって衝上が起っているためにこの両者は完全に調和せず亜調和というべきであることを知った。

カルスト地帯を詳しく調べるときには例外なくライム石のケープが発見できるしその著しいものはすでに知られていて名前がついているがその内部は知られていることがほとんどない。その内部についての伝説はあるが多くは荒唐無稽である。私は村の青年や小学校の先生の援助を受けて探険隊を造り知りうる限りの洞窟について簡単な洞内図を作った。まだケービングなどが流行しない前である。こうして判ったことはライムストーン・ケープはライムストーンが水にと

けて できるものであるから どう間違っても大きくなって もそれはライムストンの容積からはみだすほど 大きくなり得ないという 当り前えのことであった。 それに洞窟の形は ライムストンのディップ・ストライクに徹底的に支配されていることである。 このことはライムストンの構造を知る上の 大きな都合のよいエビデンスである。 洞窟の大きなものの中には 多く伏流がある。 伏流の中に滝があれば すなわち断層の存在をあらわすものである。 すなわち滝は断層の存在を表わすものであるが 洞窟は永く断層に支配されず 洞窟が永く沿うて発達するのは やはりディップ・ストライクすなわち石灰岩の起伏である。 というのであった。

以上の二三の点を調べることによって 私は石灰石の姿勢について自信を得た。

① 石灰石層は尾根に分布し 能郷白山のブルートンを中心にして逆U字型に配列し U字はE—Wに 12km NW—SEに 20kmに 汎っていること。

② 石灰石層は尾根の中心に向かって傾斜し すなわち向斜構造をしていること。 この向斜の両側には軽度の衝上が存在し 灰石層とその外側にある岩層とは 亜調和の関係にあること。 灰石層はここから出た珊瑚 無煙炭 珪化木などの化石とグリーンロックの存在から 古生海中のバリアーの堆積物であることなどのことが判った。 更にあとで判ったことだが この舟底型の構造は 古生層内はもちろん 古生層が変身して傾家変成岩(花崗岩)一飛驒片麻岩—に変わった後でも この構造は長くそれらの岩層の中にその蹤跡を留めるといふことである。

このようにして 35kmに 汎って ライムストーンを追いかけた結果 判ってきたライムストーンの特性について 意外なことがあることを つけ加えておくことは 無駄ではないと思う。 ライムストーンは Uターンするところにおいてそのビスコシティによって厚く(曲り目で)複雑な層内褶曲をする。 過去において地質家が 何々運動という驚天動地の激しい運動を 幻想したころのものは多くこういう局部を 観察した結果である。 これと対象的に Uターンしないところ 直進するところのライムストーンは 著しく薄くなり 層内褶曲は見られない。 過去の地質家は こういう薄層を小レンズの連なり(連珠状)としているが こういうライムストーンは 薄くなり $\frac{1}{2}$ m位になっても なかなか消失するものではない。 これは小にしては 埋蔵量の計算を誤まり大にして 古生層の構造の眼を 見逃がすものであるから 若い野外地質家は 十分に注意することが必要である。

尾根から沢へ移ったのは 新緑もすぎ山の花も散って 青葉だけが 峡谷の水もアマゴ(天魚)も隠している根尾の一番淋しいころであった。 G層に囲まれた山腹の領域は どの沢の露頭も頁岩が多く 地層は NW—SE行し 北に傾斜し その間にはさまる角岩の薄層もそうであるという風で 何日歩いても一つの構造もなく 根尾断層の蹤跡もつかめないという退屈のものであった。 しかし根尾の中心である垂水河原から南に下るにしたがって 角岩が次第に多くなり 日当をすぎるところから 岩層のディップ・ストライクが錯雑になって これから岐阜に出るまでの間に 毎日積重ったルート・マップのデータは まとめようのない状態となった。 ふつう地質調査では一日歩いたものを その夜に整理し 翌日はまた新しいルートを調査するかであるが この怠惰な学生は歩くのだけが面白く 整理が苦手であったから しぜんデータが山積したのだ まとめができないから記入したものは乱七八裂で 山を歩いていてもそれが重荷となって 踏む足が重かった。 たとえそれが嘘であってもよい。 積み重ったデータを整理する鍵を得て 半分でもよい整理しまとめて スッキリした気持ちで山を歩きたいと思はぬ日とてなかつた。 もう夏も過ぎようとしていた。 根尾から岐阜に出る途中で 濃尾地震のときに地表にできた断層が 一度消失して 他の地点へ乗り換る猪穴坂^{ヒシヤナ}という谷中峠がある。 峠の上に仰向になっていると 根尾断層の通る谷筋の上に帯のような雲がでていた。 この谷筋(NW—SE 走)を界にして 天上にはその NEの空に北風が その SWの空に南風が吹き出したのであろう。 NEの空にあった帯状雲がいくつにもちぎれて 谷筋のNEの空では SW方に弓を引いたアーク状の雲となり 谷筋のSWの空ではNEの方に弓を引いたアーク状の雲となって これらのアーク状の雲は 谷筋に向って近づくように見えるではないか。 私は立上って「これこそ鍵だ」と叫んだ。 江原真伍がウイリスの太平洋底の膨張論から出発して 四国の地質構造から太平洋運動 日本海運動を提唱した時の10年ほど前のことである。 もちろん近頃流行しているプレート説などの 可否を論ずる若い人達の生れない前である。 私は天が一人で険しい山河を渉猟している若者に 啓示を授けたものと 一人で感激し 岐阜凶書館に籠城して この鍵によってデータをまとめて 地質図を造った。 自然の真実を写していない地質図は それができ上がったすぐでも 見ていて嫌な感じがするものである。 これを持って京都へ帰る前 もう一度根尾断層をめぐる主要なルートを廻って 吟味したが この鍵によって幻想した地質図は 実際とは全く一致せぬ虚構のものであることに 失望し落胆したのである。 天は怠

情な学生などに 啓示を与える筈はなかったのだ。早々気付いて歩き直してよかった。もし歳月がたった後では 地質図に対する嫌悪は 一生ぬぐえないものになったであろう。だがこの2年前に 青春の大きな挫折に遭遇していた私は この挫折にあっても 根尾地質図を放抛はしなかった。卒論にはもう間に合わないが 根尾地質図のやり直しをすることにした。古生層は石灰岩・輝緑凝灰岩・砂岩・頁岩・角岩などからなっている。地形上その骨格をなすものは角岩である。私は角岩を追跡することにした。この追跡によって 意外な角岩の特性といったことを知ることができた。角岩の直進するところ つまり露頭が直線に並ぶところでは角岩の層内褶曲が物凄く そのディップ・ストライクが無茶苦茶である。これは古生層の角岩露頭に普通にみられるところで 私がこれらをディップ・ストライクのみによって つなげ得るとして 失敗したのは このためである。これに反し 角岩のターンする曲り目では 層内褶曲といったものは あまり見られず ディップ・ストライクは徐々に変わって Uターンする。つまり石灰岩層—G層のそれと 全く反対の動向を角岩はとっているのだ。このことは後に 昭和28年ごろ 丹波の赤石珪石の埋蔵量を調査した時にも そうであったし もっと後に 岐阜大学の梶田助教授の 金華山での珪石の所見でも そうであったという。若者はこういう角岩の特性を知らないで 闇雲につないだから挫折したのであった。この角岩を主とするD層の追跡によって D層が日当付近を中心にしてUターンして 1つの構造を造っていることを発見したのは 秋も爛なころである。ついでもう1つの角岩を主とするB層が 高富を中心としてUターンし これらの地層がUターンするところが濃尾地震の際地表にできた断層線を 包むような姿勢をしていることも判ってきた。

以上はさきに述べた石灰岩層のUターンと調和し 根尾断層をめぐる同一の背斜構造をつくるものであるが 更にこれの駄目押しをするように その南隣で岐阜のNEの長良川で D層のUターンがみつきり その延長である犬山のNE 日本ラインで B層のUターンすることがわかり これらは明らかに 根尾背斜の南翼をなす一連の向斜(現在は背斜)を 意味することに疑をはさむ余地がないことに納得して はじめてこの第一回の調査を終えたのである。

こうした岩層のUターンするところをつないでできた構造こそ その存在を信用してよい 確実なものといえよう。

こうした背斜の軸面に一致し 背斜の支配を受ける断

層が 濃尾地震の際生動した根尾断層であることは すでに度々説いたところであるので ここでは詳しくは叙べない。濃尾地震の際 地表に生じた眼にみえる断層—地変線は この地質的に証明できた軸面断層が 表土に作用した姿勢に外ならない。なお根尾断層をめぐる地質構造と地形について 一言加えると 古生海中の地背斜は 現在は向斜をなすもの—石灰岩・輝緑凝灰岩を主とするG層は 多く主陵をなしているに比べ 古生海中の地向斜 現在は背斜をなすもの角岩・頁岩・砂岩を主とするA・B・C・D・E・F層は 多く谷・平原・丘をなしている。

これで根尾断層をめぐる岩層とその構造をはじめて調査した時のいきさつを 叙し終った。野外地質調査の成果というものは けっして華々しいものではない。いわば極く平凡なことを 確実にたしかめ 積上げていくだけのことで 才能のある人には むしろ退屈きまるものであろう。しかしこれを辛抱強く堪えて 調査範囲を拡大してゆくときは 案外な事実が判ってくる幸運に めぐり逢うこともある。驚天動地の地殻運動の現象は 機器による幻想のみによって 思い着くものではない。ここで予想もしなかったことは 濃尾地震のとき生じたいろんな現象は 1つに古生層の褶曲 詳しくは背斜に原因し 支配されているということであった。

いままで大蓮華嶽から 立山後立山連峰の領域内の古生層を 古生海のバリヤーを中心に堆積した岩層(石灰岩・輝緑凝灰岩)を求めて 追跡してきたが この地域では岐阜県地質図によって その延長の動向を知りたい。

牛丸周太郎がコンパイルした岐阜県地質図は 近年のよい図幅である。この図幅が公けにせられ(昭和40年)まだそのインキの香りも失せないうちに 新しい岐阜県地質図の作成がはじめられ まもなく(昭和45年)公刊せられたが こおいうせつからな図幅が 果して前の図幅をしのぐものであるかどうか。同じ年に出版せられた富山県地質図は 前の富山県地質図が昭和32年の公版だから 13年間の間をおいている。新しい図幅はGSの名古屋支部で企画せられ 製作されたと聞いているが こういう条件のもとで作ったのでは 誰れが作ったとしても 立派なものができるはずはない。図幅は人手と予算だけでは できるものではない。第一前の図幅が公表せられてから 少くとも10年間は 前の図幅をそのまましておいて その図幅を使い その功罪を見極めるのが 地質家の礼儀—仁義というものであろう。とくにこうした岐阜県全図というようなラージ・スケール

の地質図を 改変し新作するに当っては ある程度の歳月を経てから 学術の進歩するのを俟ち 又特別の地域の精密な地質図が 完成したものが集積するのを俟って これを経験に富む老練な地質家が コンパイルすべきで 性急な調査は謹むべきである。 所謂水満つるをまって 渠が自ら成るようであらねばならぬ。 このことは富山県地質図の新旧と 岐阜県地質図のそれとを 比べてみればおのずからわかるかと思う。

岐阜県新地質図は 再び牛丸周太郎によって 改訂されたものか 己に48年8月に出来 印刷をまつばかりであると聞いているので この文章に引用するのは それによることとし いまのところは 旧図幅によることにしたい。

岐阜県の古生層の褶曲と これに付随した断層に就て述べると まず

- A・根尾背斜・能郷白山から根尾谷を通り 関に至る50 km で これに沿ひ濃尾地震の際 地表に断層ができた。 St・NW—SE~E—W
- B・舟伏山向斜・AのN翼をなす向斜で 舟伏山から美濃市北で 長良川をトラバースして 更にE進し 武儀郡八日市付近にいたる60km で St・NW—SE ~E—W 数多の石灰岩層が胎胎する。
- C・水鳥谷向斜・Aの南翼をなす向斜。 平野まで南下すると AとI背斜にはさまって消失する。 延長20km。 St・NW—SE 石灰岩の厚層が分布する。

A・B・Cは 根尾褶曲に属するものである。 根尾褶曲の北に隣る波状褶曲の中に 露出する石灰岩群一帯については次に述べる。

D・八幡町石灰岩帯・これは八幡町北で露れるもので 数多の石灰岩の連珠よりなるか E進して14km で 石英斑岩の下に没する。 St・E—W~ENE—WS W。

E・大谷石灰岩帯・Dに平行して St・NE—SW に8 km に汎る石灰岩の 連珠状の露頭があり その東方は石英斑岩の下にかくれている。

DEは別々の2つの石灰岩帯であることは 次に述べる。

F・御嶽北麓石灰岩帯・St・NE—SW 18km に汎る。

G・御嶽北方石灰岩帯・St・E—W 走するが これは高山市のNから現れて安房峠のWで方向をかえて N—Sとなるまでの延長26km に汎る石灰岩の連珠である。

EGの間に幅20km, DFの間に幅4km に汎る膨大な石英斑岩が敷行する。 これらは濃飛流紋岩と呼ばれているものである。 石灰岩帯はこれに距てられて 直接連絡するかは はっきりいえないが 根尾谷における古生層の褶曲から類推して これらは濃飛流紋岩の下において Uターンしているものと思われる。 Uはすなわち逆さのUであり Uの軸の St は NW—SE であって 御嶽山一位山—尾崎山の線がそれであろう。 ここのUターンの褶曲は 褶曲の幼い段階を表わしているものであろう。

根尾谷を特徴づけた背斜軸面に一致する断層の存在はここでは濃飛流紋岩の下になるので それを知る由もないが。 私はそれを 濃飛流紋岩の分布地域の地形に生々しい痕を残し 且つ河川の沖積層を切っている阿寺断層というものに擬している。 濃飛流紋岩こそ 阿寺断層なる軸面断層なる裂罅から 裂罅にそって噴出し 溢流したものに外ならないものであろう。

H・これから北方の(古川町北方)片麻岩に至るまで つまりその南隣の古第三紀—白亜紀層の下にでている石灰岩の動向は 今までの古生層中の石灰岩のそれと調和的ではない。 しかしこれはその露出区域が あまりに断片的なと 調査の不充分なことから来ているもので 今この岐阜県地質のみを見て 調和しないと断定してしまうのは 早計であろう。

岐阜県地質図の北辺である古川以北の片麻岩の中の石灰岩帯の動向も 今までの石灰岩帯の動向に 一致せぬように見られる。 それは蛇行しながら 全体として St・E—W 走して 神岡町の北でN—Sに向う。 これは蛇行しながら 全体としてE—W走するあたりは 濃飛流紋岩の北の延長にあたるどころから 地層がUターンするところの逆Uの冠りの反映とみてよく N—S走するところは Gに調和するものと見てよい。 猶H地域の石灰岩と 富山県地質図のそれとの間には 相当の喰違いがあるようであるが 富山県地質図のほうが 新しく詳しいので 立山・後立山の章で のべた石灰岩の構造によりたい。 ここでは石灰岩帯の主たる動向が 池の山の W で NNW—SSE 走したものが 神岡町の北で ESE に向って蛇行することを 附加しておく。

I・CのSに谷汲のNを通る背斜がある。これはCの石灰岩の追跡によって知られたものである。このSの翼は有名な赤阪の石灰岩である。IのSt・NW—SE 延長は11km。

J・伊吹山の石灰岩は 徳山の向斜の南端をなすものであろう。石灰岩体は舟底型をなして 古生層の上に衝上している。

K・これから鈴鹿山脈に移る間に 関ヶ原の構造があるらしい。これらは江濃地震に生動した浅井断層のグループに属するものである。養老町を通るNW—SE の方向の構成は 延長10km あるが これも同じようなものである。

L・霊仙山からN—S走する三国岳・御池嶽・藤原岳・竜ヶ岳など鈴鹿山脈の脊梁を占める石灰岩帯は 徳山—伊吹山向斜の延長と見てよろしかろう。このあたりの地質構造については G Sの宮村 学が発表しているが大体において 私は古生層の褶曲に対する考に撞着するところがないようである。

総 括

最後に大蓮華嶽の領域の黒姫山から 岐山曲阜の領域の伊吹山に至る間の 古生海中に存在したバリアーの蹤跡を 石灰岩・グリーンロックの存在 舟底構造の存在 および褶曲などから 辿ってみよう。

大蓮華嶽の領域の明星山から黒姫山へ 更に権現山に至り 鬼ヶ鼻で日本海に没するまでの 延長14km に汎る石灰岩は 走向NNW—SSEに伸びてきている。これが権現山付近で 走向E—Wに転じている。すなわち NNW—SSE 走してきた石灰岩は海中に没する前に E—Wにその走向を転じて 海中でUターンして 宇奈月を中心とする石灰岩を含む岩体（立山・後立山連峰の章のA・B岩体）向うものなることを 推察することができた。この海中に没している間の延長は 凡そ10km。上陸してSを指し 宇奈月の北方で 石灰岩が陸上に露出する処に 至るまでの間凡そ12kmである。

この推定された石灰岩の動向は 親不知の沖合を中心に 大きくUターンするもので Uの大きさはE—Wに12km、N—Sに14kmある。これはその両翼の石灰岩の配列から見て 不自然ではない。石灰岩がUターンするところに生ずる構造の軸は N—Sであって 大蓮華嶽のW麓を Nに直上して 親不知あたりに出るものと 考えることは 片状閃雲花崗岩（富山県地質図で

是新期花崗岩類）の古期岩層に貫入している配列から見ても 無理がないと思う。

次に石灰層の舟底構造については 今述べた大蓮華嶽の領域の大構造のE翼をなすものについては その分布と地形のコンターから 読みとることができる。これを挟んでいる衝上についても それらの位置にある断層の傾斜から それが衝上であることが 推察せられる。

ただ大構造の西翼をなす石灰岩を含む火成岩類の構造が 舟底構造をしているか どうかは それを推定するだけのフィールド・エビデンスがない。石灰岩層およびそれを含む火成岩類は 多くN—Sの走向を示し 直立またはWに急斜することだけが 判っている。

現在の背斜向斜は すでに幾度も述べたように 古生海中の地背斜が 起上によって向斜（舟底構造）となり 地向斜が背斜となったものである。しぜん親不知からまっしぐらに南下して 大蓮華嶽のW麓に至る構造は背斜である。新期花崗岩類はこの背斜の軸を中心にして 侵入したものであろう。これはいうならばホッサ・マグナを小型にしたものである。この大構造のE側にはいわゆるホッサ・マグナが存在する。この領域はホッサ・マグナの支配下にあり その影響と思われるものがたくさん見られる。巨視的にいってこのSになる立山・後立山の領域も 同じであるといえよう。

立山・後立山連峰の章のA岩体は N—S 10km、E—W 5km に汎り 主として閃緑岩質アグマタイトからなり その中に含まれる石灰岩の小レンズの走向は おおむねN—Sで 直立またはWに急斜する。この石灰岩の層群の南延は SEに飛んで 東・西鐘釣山で Uターンするものごとく 北延は 負釣山北の NE—SW断層によって切れるが この処で逆さにUターンして Bの含石灰岩岩体につづくものと思われる。A岩体のE隣・W隣は 新期花崗岩類によって貫入されるが これはこの処に存在した背斜に沿う裂罅に 貫入したものである。Aの含石灰岩体は 地形のコンターから 舟底構造をなすものであることが 読みとれる。

B岩体はNは小鹿熊山から Sは立山の大日岳まで N—Sに22kmに汎って 伸長する。幅は5kmある。B岩体を構成する各岩石の走向は そろってN—Sで 直立またはWに急斜するが 岩石内部の葉理・片理は必ずしもこれと一致せず とくにその傾斜に緩い部分のあるのが 目立つ。片理が 原岩の走向・傾斜と 関係があるものとすれば B岩体内部には 構造が存在するものと思われる。石灰岩はとくに石灰珪質片麻岩類中

に夥しいが、その他各岩系中にも存在する。またE側の鳥帽子山・僧ヶ岳グループ中には火山岩類あるいは火山砕屑岩・凝灰岩などを原岩とするものが含まれている。これは石灰岩の存在とともにB岩体がかつて古生海の地背斜（バリアー）で堆積したことの論拠となるものである。B岩体のS延は、大日岳の安山岩の下に嘗て存在し、安山岩を溢流さしたであろうE—W性の断層によってWに飛び、C岩体となって露れる。

C岩体は、大品山を中心とするN—S 10km、E—W 12kmの区域を占める。その中に含まれる石灰岩はN—Sに雁行する。（岩体のS延はENE—WSW性の断層によって、数度齟齬しつつD岩体に向う）

このN—Sに走る石灰岩を含む岩体は、A・B岩体からC岩体に至るまで42kmある。そのNのUターンするところを数えると54kmある。

D岩体は、池ノ山を中心とするE—W 10km、N—S 4+ α kmの区域を占める。この岩体に含まれる石灰岩の走向が、高原川を界にしてそのNEのそれがNNW—SSE～N—Sなるに対し、そのSWのそれがNW—SEである。これは明らかに石灰岩がUターン（ここではVターンといったほうがよい）していることを示すもので、高原川に沿ってNW—SE方向を軸にした1つの構造が存在することを表わすものである。これは今までの石灰岩の走向が、たとえ断層によって飛んだり齟齬することがあっても、例外なくN—Sを示し、その構造の軸もまたN—Sであった。これに反しD岩体の構造の軸はNW—SEに変っている。これは立山・後立山連峰の領域以来の構造がここで転換しようとしていることで、注目すべきことであると思う。なぜならばこれからSWの岐山曲阜の領域に入るとNW—SEの軸を中心とする構造が多くなっていくからである。断っておくが石灰岩層の伸長方向はN—SからNW—SEなど色々な方向に変っていくが、巨視的に見た伸長の方向はN—Sのものが、ここからNE—SWに変ってゆくので、今迄にのべた小構造の変るのとこれを混同してはならない。

E・F岩体は、祖父岳からNE—SWに25km幅10kmを占め、主として石灰岩の厚層から成り、黒雲母片麻岩類、角閃石片麻岩類、片麻状花崗岩類によって進入せられる。角閃石片麻岩類中には、塩基性ないし中性の火山岩および火山砕屑岩を原岩とするものがあり、E・F岩体がかつて古生海の中のバリアーで堆積したことを示している。石灰岩層はSEにゆくほど薄くなっている。

石灰岩層は、祖父岳のS、金剛堂山のW、人形山のSにおいてN—Sを軸とする小構造を示しているが、巨視的にみれば、これらの小構造を含む石灰岩の厚層はNE—SWの方向に連り、この東側のF岩体の石灰岩層がNNW—SSEからENE—WSWに回転するのと合せて考えると、全体としてNW—SE方向の軸をもつ大きな構造を示している。この構造はD岩体で述べた高原川に沿う構造(NW—SE)と調和する。すなわちこの大きな構造の外周(北辺)をなす3つの厚層状石灰岩のつくる小構造と、中核をなす大きな構造との配列と、これら大小の構造をつくる石灰岩層の厚さから考えて、古生海のバリアーの中心は、小構造の並んでいる処にあったものと思われる。すなわち、高原川に沿う構造は、この大きな構造に包含されるものようである。したがって大きな構造の軸は、かつての古生海の地向斜の中心に連なるものであり、現在は起上して背斜をなしているものであろう。

E・Fの石灰岩をそのままつなぐと、つまりここでいう大きな構造のUターンする処の冠の部分に当ることになるが、これらはNE—SWを示し、南下して岐山曲阜の領域を、袈裟がけにして伊吹山に連互するべく、その延長は130kmに及んでいる。これは古生海中の巨大なバリアーの1つである。

ここで、岐山曲阜の領域に入る前に、いま一度已往をふり返ってみよう。これは一寸しつこい様であるが、この文章に付図をつけられなくなったので、やむを得ないことと、ご了解を願いたい。これまでの石灰岩を含む岩体は、親不知の沖合で岩層がUターンする大構造のW側をなすもので、その走向はN—Sで、延長54km・幅12—15kmあり、石灰岩層は巨視的に見て1つの層準のものと思える。したがってこれはそのまま、古生海のバリアーを表わすものと見ていだらう。

しかしこれからSの構造は、そのまま古生海のバリアーを表わすものではない。これまで構造の軸はN—S方向の唯一の背斜であり、バリアーはこれを取り巻く向斜を中心に配列する石灰岩帯であった。つまりこれまでは、話は単純であった。しかしこれからの構造の軸の方向は、N—SからNW—SEに変わり、それが1つではなく数多あり、それが並走し、互に隣合って波状を呈している。且構造に含まれている石灰岩も、少なくとも2つの層群がある。このうちどの構造とどの石灰岩の層群のあるところを、古生海のバリアーの位置とするかは、難しい問題であるとともに、この文章の目的とするところであるから、どうしても解決しておかねば

ならぬ。これからの石灰岩には厚層をなすものと薄層あるいはレンズ(扁質)状のものがある。厚層をなすものの多くは岩層のUターンするところ集っている。もしこの厚層状石灰岩のみをつなげるとすればそれは構造のUの冠(逆U)をつなぐこととなり一応厚層状石灰岩は構造と関係がないことになる。はっきりいうと構造の軸の走向はNW—SEであるが厚層状の石灰岩は構造のUターンするところの冠をつなぐことになるからその走向はNE—SWになる。これは何を意味するものであろうか。これはそれを構成する岩石からいって古生海のバリアーでの堆積物に外ならぬからやはり一種の構造である。しかし地質図から読みとれる構造とは異質もの次元の異なる構造である。すなわち地質図から読みとれる構造を小構造であるとすればこれははるかに次元の異なる大構造である。すなわちこれを古生海における長大なバリアー地背斜であるとすればこれに対応する地向斜は地質図上の何に当るであろうか。そのような地向斜の軸はこれまで大蓮華嶽・立山 後立山・岐山曲阜などの付図には存在しないと思う。もっとラージスケールの地図に求めなければならぬ。私はメディアン・ラインがそれに当ると思っている。メディアン・ラインの走向はこのあたりではNE—SWであり石灰岩厚層のそれと調和している。

そうすると岐山曲阜の領域に多いNE—SWの軸を有する構造は一体何であったか。私は古生海のバリアーという大地背斜から古生海の大地向斜に向って濺いでいる幾つかの小地背斜・小地向斜が起上してできた小構造と解釈すべきものであると思う。

御岳山麓から位山・尾崎山を含んでNW—SEの方向に膨大な火山岩が敷衍する。濃飛流紋岩と謂われるものである。この下に構造があると思う。それはこの流紋岩のNE方古河町・神岡町の北の片麻岩体の石灰岩帯(H)は蛇行しながら全体としてENE—WSW走しているからである。これは構造のNで地層がUターンする冠の部分の反映とみてよい。この帯には1向斜1背斜がある。また高山市の北から古生層中の石灰岩層(G)はE走する。これは明らかに構造のE翼を表わしている。更にこれのS御岳山のN麓はE—W走する石灰岩を含む古生層の背斜の構造(F)がみられる。これも(T)と同様構造の翼を示すものと見てよい。

さて構造のW翼を尋ねると古生層中に石灰岩帯がNE—SW走するのが奥明方大谷に見られる(E)。

これは1背斜をなしている。これは流紋岩の下でUターンして(G)に連るものであろう。

八幡町で長良川をトラバースする石灰岩帯(D)はE—W走する1つの背斜構造をなすものでこれも同じくUターンして(F)に連るものであろう。

濃飛流紋岩下の構造はNW—SE走する1つの背斜構造なるべくこの構造の軸面には断層を伴うものと思われる。阿寺断層もまたその1つであらう。

このS方美濃市の北の長良川をトラバースする石灰岩を含む古生層のE—Wの向斜構造はまもなくその走向をNW—SEに転じて根尾の船伏山の大石灰岩の厚層に向う(B)。これは根尾断層と一致する根尾背斜構造(A)のN翼をなすものである。

根尾構造のS翼をなすものは能郷白山の南から水鳥谷に至る大石灰岩層がそれである(C)。これは向斜をなしている。この石灰岩層はこのSで1背斜(NW—SE)をなして(I)伊吹の石灰岩の厚層に連なるものの如くである(J)。伊吹山の構造は1つの向斜構造でこれは走向N—S直上して徳山の向斜に連なる。これはSに向っては鈴鹿山脈の稜線に舟底型の構造をして分布するN—S性の向斜になる。

この中間の関ヶ原の低地には走向NW—SEの浅井断層がトラバースしている筈である。浅井断層は根尾断層と同じ性質の姉妹断層であると思われこれと同じ走向(NW—SE)の背斜構造が養老町を通過して存在する(K)浅井断層がJの向斜軸を切るものなるやまたはその分枝なるやは地質図ではまだ明らかではない。ここに岐山曲阜の領域における構造の特徴について一言するとNW—SE軸の背斜が目立つことである。これらの背斜はNWで閉じSEで開いている。すなわち逆U字にUターンしている。この構造から推測せられる古生海中のバリアーはどうであらうか。私はこれらの構造のNの端である地層がUターンする。すなわち逆U字の冠をつないだ処がそれに当ると思う。じじつこの処においては石灰岩が厚くまた輝緑凝灰岩が多い。則ち構造の軸がNW—SEであるのに対し古生海中のバリアーの方向はこれと調和するというよりはむしろこれに直角に近いNE—SWの方向を示すのである。これは何故だろう。私は構造のしめす地質次元とバリアーの示す地質次元が異なるためであると思う。則ち地質図に表われた構造は古生海の中心に向う小構造そのものを表わすものでありバリアーはこれら小構造を統括した地背斜を表わすもので古生海の中心すなわち地向斜と次元を等しうするものであるからである。

ここで岐山曲阜の領域における バリヤーを辿ってみると 立山・後立山の領域の祖父岳から 人形山のEに至り これから NE—SW 走して 古河町のN付近で 片麻岩の領域を脱して 古生層地帯に入り 小構造の冠を渡って 多少の出入りはあるが 舟伏山・水鳥谷から 伊吹山に至るまで 概ネ NE—SW 走している。伊吹山から 古生海中のバリヤーは N—S 走して 稜線の上を南下するが これからWおよびSについては 「大阪・神戸・京都・奈良・大津・堺の基盤・褶曲」において述べた。この徳山—伊吹山向斜のS延は 領家帯に入り 更に南下して 高見山付近において 一旦メディアラインに近づくと 再びN上して 大和高原のW縁にそって 奈良付近に至り これが奈良平野をトラバースして NWに向い 松尾山から生駒山にでて これからWに向かい 大阪平原下に没するものようである。これから六甲山の稜線に現れて NE—SW に向い 淡路島で海没する。

ここで領家帯に入ってから 古生海のバリヤーと推測したものについて一言 述べておくことが必要である。ここにのべた領家帯のバリヤーとしたものは 多く花崗岩の中であって 現在はその中に 石灰岩・輝緑凝灰岩などのバリヤー堆積物の直接の証拠となるものが見られない。しかし舟底型の構造が 稜線一帯に分布し これらは中心に向って傾斜する数多の衝上によって 囲まれている。これは特筆してよい珍しい構造であって どこにもあるというものでない。この特異な構造を追ってみると 古生層地帯のバリヤーの延長から発して 数10軒に連ってつづき 全体として大きくUターンして 構造をつくっている。

この花崗岩の中に残る構造をバリヤーの蹤跡とすることの真偽は 岩石学の進歩を俟つより外はないが 今のところ野外地質学からは 淡路島以西の地質図を追ってみれば 何処かでその真偽が判るかも知れない。たとえば成羽炭田・大賀地方・岩国地方・秋吉台などである。以上日本海の親不知から淡路島に至る 古生海のバリヤーの蹤跡を 凡そ 500km に汎って 辿ってみた。

このへんで「わが日本構造論」の筆を 擱いたほうがよさそうである。また内帯の $\frac{1}{4}$ を終ったばかりで これからが面白くなるのであるが どうしても筆をすすめる気になれないからだ。直接の原因は 略図の製図を行う経費が どこからも出なくなったし 私自身の半身にも 震がきて じぶんで製図することができなくなってきたからだ。地質の論文から 地質図をとり 略図をさえ とり去ってしまうことは 致命的である。

文章のみで地質図を表現することは 読む方で大変であり 書く方は それにも増して複雑なことである。ここでまた 地質図および略図が 地質にとって 一番重要なことであることを 説く気はない。こういうことが わからなくなって来ていることは 今の時代の趨勢であって 1雑誌社をときふせ 地質調査所長を説いても どうなるというものではない。時代の趨勢が 地質にとって 地質図やそれを表現する略図が 眼目であることを認識してくるのを 俟つほかはない。

さらにもう1つ大きなことは これは私じしんの文章にも 責任があるが 私が10数年書きつづけた明治・大正・昭和の名地質図をかかれた人々に 対するデマが 拡がっていることである。このデマの出所をさぐってみると これらの人々から 教をうけた人々 あるいはほとんど一生といてよいほど世話をうけた人々から デマがでていることが 私をがっかりさせた。地質家は大学を出てから 多く地質で生き 地質を貫いて T年になり 老いて 地質を離れる。これからある人は 年金生活に入り ある人は父祖の財産事業を守って 新生活に入る。それは自由の生活に入るのであるが 彼等はこの時点を界にして 過去の地質を中心としたモラルから 解放され 正直というモラルから離れるのであろうか。「中村先生は フィールドを歩く前に 地質図を作った人である」「石井先生が フィールドに出る前に 地質図ができていたのを見た」こういう言葉は 私がG・Sにいた時分 しばしばきかされた言葉であるが こういうことをいわれている人々は フィールドを歩かぬことを じぶんも承認し 人々にも広く知られている人々であったから じぶんは驚きもしなかったし 成程そうかと 納得しただけであった。こういう人達の多くは 定年前に会社に転出し 経済地質の方にすすんでいた。みな才覚のある人々である にかかわらず世間的に成功した人は なかった。だからG・S出身の人々は 成功したためしがない。というジンクスがあった位である。歩かずして 野外地質をベースしないで 鉱床の発見がある筈はない。

こういう人々に対して いわれていたことが 地質図の神様のように 私が思っている先生達に そのまま転用されているとは 何事であろうか。

それはそれとし 伝言者は 私より若い人もおれば古い人もいる。フィールド歴は もう30年をこすのに地質図を見て それが歩いて造ったものか どうかが判らぬのであろうか。と憤ってみたが それは間違っている。デマの主が 名地質図の作者に 若いときから薫

陶をうけ それからずっとしたがってきた男であることを充分知っているから そういうことに疑をさしはさまなかつたのだ。 こういうデマを飛ばすものがありそれが伝言者によって 若くて地質図を充分に見ることもできない者達の間には 拡がってゆくのは 嘆しいことである。

私はこれは 地質家の間に 古い人も若い人もふくめて 戦後にモラルが低下しつつあるためだ と思う。 定年65を過ぎてから もう3年もたった私の同時代の友人達は どんどん私から遠ざかって行くような気がする。 彼等は 残された財産と地位を守ることだけに 一生懸命であり 地質の研究や友情などを 顧みる暇がないらしい。 若い人達も 早私ごとと付合っても 世間的には 何ら得ることのないのをよく知っている。

私はひとりだ。 ひとりになってみると こんな環境では 古人がいったように 「四体未だ破れずして心先づ衰えて」つい 筆を投ずることになるのだ。 地質は一生の仕事とするに足らない低い次元の仕事であろうか。 地質は禅や詩などちがって 一生これに没頭してもモラルを高め得ないものであろうか。

こんなデマを聞いていると 私も迷わざるを得ない。 しかし私は79才で命終られるまで 地質に没頭して じぶんも高き座を守り そのふれる人々に安心を与えた江原真伍先生の晩年に出逢っている。「わが日本構造論」は これで終ったわけではない。 時世時節の訪れるのを俟って 再び書きついでゆくつもりである。

地質は人間を高めるものではない。 地質家に信用がおけないことは 悲しいことである。 さしあたり わたくしなどは これからどうすればよいのであろうか。 こんな時 教をうけた人は 多くもう故人となっておられる。 まえに江原真伍先生伝を編むとき それは先生のなくなられる前の年だったと思うが 先生自身の口からの 思い出話をききに行ったことがある。 先生は自分のことより 沢田俊治という人のことについて 話されることが多かった。 先生が帰依し 崇拝された川北洪川・織田小覚・石川龍三並みである。 その時「沢田俊治は私より1廻り先輩である」といわれた。 先生の亡くなられたのは 79才で あれからもうかれこれ10年たっているから もし生存されているとしても 101才の筈である。 昨秋江原静江夫人にお逢いしたとき お尋ねしたら 「御高齢でいらっしゃるから生きて居られるかどうか。 その後のことははっきりしない」とのことであった。

さてその沢田という人のことは「江原先生小伝」中に

こうある。「この間において 江原は不思議な人物に遭遇し肝胆あい照して ついに後半生の伴侶となった 不思議な人物とは 沢田俊治のことである。 沢田は盛岡中学の出身で 朝鮮で教員をしていたが 内地に帰り 大正元年から放浪生活をはじめた。 その足跡は全国をあまねく掩い 台湾にまでおよぶようになった。 冬は南国を歩き 夏は信州・東北を歩いたのは 樹下石上の生活であったからであろう。 大正12年は震災があったので樺太にゆき 帰ってから岡山—京都—名古屋旅行の途次 川村真一郎に聞いて 江原を尋ねてきた。 沢田はひどく疲れていたし 動作に純真があふれていたのが 初対面であったが 江原は泊めた。 沢田は蒲団や蚊帳に入らず 女中は驚いた。 江原夫人は家族同様にあつかった。 沢田は食事中思わず涙をこぼした。 電車の中で顔をじろじろ見られるのが嫌で よく京都駅から江原の家まで 長い街々を歩いてきた。 沢田にはそんな神経の細かいところがあった。 物部川の調査には「こんどは逢えない」と手紙を出しておいたのに 沢田は昼夜兼行で追いかけ 数日かかかってとうとう足摺岬で追っていた。 毎日江原の2里あとを慕っていたのだ。 2人は形影相伴い 25年間四国を歩いた。 2人の調査旅行こそ 日本地質史のうち もっとも美しいページを飾るものであろう。 寒山拾得が相たずさえて遊行するのを 現実に見るような気がする。 しかしそれは今の地質家には判らないことである。 戦後2人の研究が価値のないものだ とある大学が叩いたことがある。 古い層序や構造論をかえりみず 老人や先輩を無視したり 反対したりすることは 今の地質界の流行で その大学もこの流行の圏外ではなかつたのだ。 しかし現地の大衆の見る眼は 地質界の流行に支配されず 人間界の真実を反映していた。 沢田は高知市名誉市民に推薦され 溝淵校長(剣道5段)は紀元の嘉節に 音頭をとって文化賞を贈った。 沢田は一生を独身ですごした。 江原とは10歳年長であった。 晩年は病氣勝であった。 江原は乏しい囊中から 沢田の治療生活費の一部を送りつけた。 と聞いて私は襟を正した。 山田鏡陽が79才の沢田を詠んだ詩を 横雲 広が書いたものがある。」

少壯離家志絶群
人間寵辱比浮雲
単鋌孤囊周蹤跡
彰得玄々大地文

私はこの幻の人に 無性に逢いたくなつたことは 順序を追って述べるが それは無駄ではなかつた。 学兄 甲藤次郎高知大学教授のお骨折によって 翁が生存され

ていることが判った。早速先づ高知県香美郡土佐山田町の繁藤小学校に溝淵忠広校長を尋ねた。太平洋と瀬戸内水系とを分つ根曳峠を越えると繁藤に入る。繁藤は翁の隠棲されている本山町に入る関所であり繁藤小学校は山門に当る。溝淵校長は翁のお世話をして下さる人であるからである。また翁がじぶんのことを話すのを好まれぬ方であるかも知れないから先づ校長にあってその話をききたかったからである。溝淵校長はあの終戦後の混乱の時期に衆愚に動かされず日本個有の精神を持しこの所において敢然として紀元の式典を挙げた人である。爾来全国から多数の協賛者が2月11日にこの田舎のこの小学校に集まると聞いている。繁藤小学校は今の世に珍らしい木造の古い建物で背後の小丘には神武天皇の銅像が立っている。校庭は田舎の小学校としては広くて数百人を入れるに足る。この校庭で20数年前紀元の嘉節に校長は音頭をとって高知県教育委員会の名において翁の功を表彰したのである。これはどんな地質学会や地質研究会によって表彰されるよりも尊いことであり有難いことであったと思う。溝淵一族はこの地方の豪族である。京都三高の名校長であった溝淵進馬も一族の出身である。翁も溝淵進馬校長の時代に三高の助手をしていた縁がある。一族の墓は領地の高所にあつて太平洋の波濤を瞥見できるところにある。校長は翁の墓を溝淵進馬校長のそれと並んで太平洋のみえる処に予定している。

校長はいう「先生は小柄な人だが足の骨は常人より太い。よく歩き採集した化石を5tも京都の江原先生の処に運んだからだ。先生は車が嫌いだ。京都の武徳会に行くときよく電車に乗ることを勧めるが電車に乗っては方向を間違えた時に困る。歩けば方向を見失うことがない」といって重いリュックを背負って街を歩いたものだ。四国でもやっぱりそうだ。道を歩いていてトラックを道端に止めて翁を乗せようとするが頑固として乗らない。翁はあれで案外気位が高いのかも知れない。翁にいつかはならない2つのタブーがある。その1つは西郷南州のことだ。土佐は元来南州最眉だからある時南州の話がでた。すると老師が怒り出して手のつけようがない。窓から抱え出して車に乗せたことがある。もう1つは江原先生の悪口をいうことだ。これもひどいことになる。翁は今でも時々癩癩を起されることがある。誰も手がつけられない。私の処に電話がかかってくる。私が行くと不思議に癩癩の虫が治まる。話が尽きそうになったので私は辞する前に校長から日本個有の精

神や明治に生きる話を聞こうとするとそれには答えず「私一人だけのことだ 会も団体もない」と意外な言葉が帰ってきた。それは何にもまして私の心にふれるものがあつた。「千羊の皮は一狐の腋にしかず」「千人の諾々には一士の諤々にしかず」「千万人と雖も我れ行かん」結局じぶん1人が本ものなのだ。ひとりぼっちが本当なのだ。戦後の地団研や民主主義科学などは弱者一信念のない者たちが数だけに頼っている姿にすぎない。私はこの校長という仁王様の中に土佐のいごつそうを見たのだ。わたくしはまた仁王様の中に天誅組の吉村寅太郎のイメージをみた。高取城攻略に傷いて再び立たなかつた土佐の勇士吉村の。傷いたあとの天誅組には壊滅があるのみであつた。

戦後大きな台風が室戸湾を襲つた。台風の通路になつた繁藤では山崩れが起り60人の犠牲者が出た。校長はこの悉くを校舎に収容した。この時にできた孤兒達を引きとつて今も育生をつづけられているという。翁は前に翁を慕ういごつそうの1人沢田氏の土佐郡土佐町土居の沢田病院に居られたが沢田氏の歿後昭和40年から今の本山町田井の田岡病院に移られた。帰りには校長は車までの長い廊下を半身不随の私のために肩を貸して下さつた。この校長の暖い肩こそ先生の癩癩を静め紀元の嘉節に連るものであると思つた。

繁藤小学校から車で1時間余りで本山町につく。杉と椎の若葉が美しい吉野川沿いの街道である。本山町の田岡病院は鉄筋三階建の近代的な広大な建物で翁はここの旧館である木造建に居られる。六畳2間つづきの和風の病室で1ツには付人森田女史が待っている。院長夫人の案内で病室に通ると爽に簾をかけ前には机がある。机のうしろに敷かれた床の上に翁が端座しておられた。壁には本棚がしつらえてありそこには意外にも新田次郎の新刊八甲山の遭難や長谷川伸の晩年の史伝相馬大作と津軽頼母などがあつた。いづれも翁の故山のもので翁が故郷を忘れられないで居られることを示している。翁が地質一辺倒でなく多趣味の方であるほかたえず新しいものを求められる人であることを知つた。これより先甲藤教授に院長夫人から翁はお元気で高齢の人にあり勝ちの老耄のけはいは全くない。との連絡をうけていたが全くその通りであつた。翁は「神経痛がでて困る」といわれたきりで絶句して己往のことを語るのをまとめておられる様なので傍の付人に翁の年をたしかめると確に今年96才であり彼女は9年前から病院は変つても

つづいてお世話申上げている とのことだった。女史は70才と校長から聞いてきたが まだ白髪の見えないととも70才とは見えぬ清らかな美人である。「火山岩のところでも化石がでる。澎湖島で鮫の歯の化石を採集したことがある」翁はボツボツ昔を思い出したらしく カルカロドン メカロドンと原語で つぶやかれた。

まだ三高の助手をしていた頃だから 大分前になる。そのころ 三高には溝淵進馬・森外三郎などという偉い校長が居た。2人とも土佐人だったが われわれ助手にまで 研究に没入することをすすめ 末のことなど 考えんでよいといわれたものだ。今の人はヒマラヤなど 高い処をめざしているが 私はたしか近畿の山を歩いて 化石をとり それをリュック一杯にして 暮れた野道を辿っていると 突然野壺の中に落ちた。古い野壺で 糞が一杯だった。糞はコロイド状態になっているし 背には5貫メの石があるので どうにもならない。私は大男でないから 糞の中に沈んでゆき 汚水を呑んだとき思った。こんなことをしつづけていたら 先はどうなるものでもないと思っていたが 遂に野壺の中で 往生するはめになったわい。しかし幸2人の人が 野壺の際を通して 2人で私を救出して呉れた。2人だから助かったのだ。1人では壺の中に引ずりこまれる。

しかしこんなことがあった後も この仕事をやめず 50年たって とうとうごらんのようになってしまった。

翁のお話は 私に江原先生の最後のお言葉を思い出させた。先生の亡くなられる前の年 私がニューギニアのブナーオーエンス・タンリー山脈をトラバースしてポートモレスビーに至る 地質探険の計画をしていると 地質構造の研究は 急ぐ必要はない。君には妻子のあることを 忘れてはならない。隊員にも妻子のあることを忘れてはならない。彼等を 路頭に迷してはならない と戒められた。地質家が じぶんの妻子・助手までの行末を 見てやれないことを 先生は嘆いておられたのである。

翁はこんな話をされたが この道をすすんで報われないことに対する後悔の念などは 露ほども見られなかった。四高の古谷健太郎先生がよくいわれた “尽すあって怨なし” の大楠公精神の 昭和における実践者こそ翁である。楠氏一族の跡には佗しさの余花さえ残っていない。翁のあともさっぱりしていけよう。

最後に 君はきれいなことをいっているが 翁の現在には 妻なく 子なく 家もなければ 金もなく 早くいえば 人の情けに生きている乞食の境涯ではないか。

という人が あるかも知れない。こういう人は私たちとは 異なる次元の世界に住む人で その価値感にも 隔りがありすぎるので 説明しても 無駄かもしれないが 私なりに説明だけをしておく。

数万坪の庭園を擁し 豪邸に住む男がよく床の間に 「無一物中 無尽蔵」という書を掛けているのを見ると 何が無一物中 無尽蔵なのかと思う。又私のように 土地もなく家もない者が 同じ傷を作っても 他人は瘠我慢としか受け取らないであろう。いま老師が端座せられているのをみると この傷がすこしも不自然には感ぜられない。壁間には江原先生の書かれた「筍日新日新又日新也」の掛軸があるが これも老師のさすがの容顔と マッチしている。老師の举止・動作を見ていると 誰かを思い出す。それは私が9年間 参禅した永平寺西室 清水浩龍老師である。浩龍老師も今年92才で 群馬県の迦葉山を再建し 石川県の大乗寺に永らく座った方である。戒業は一生魚肉を不喰ず 女色を近づけなかった僧として 沢木興道・佐々木玄宗とともに 3聖僧として知られた人であったが 今はこの人だけが残っている。翁と浩龍が似ているのは 高齢の故のみではなかった。その眼光が同じである。所謂慈眼視衆生なのである。昔からこういう慈眼の所有者は 衆生縁が深く たとえどんな山奥へ一人で流されても 一寺を建立すると仏家ではいわれている。老師が土佐という 自然と人情の厚い土地にきて 多くのいごそりに出逢たからとはいいいながら 今のように 心豊に 満ち足りた 清らかな生活をせられているのは この衆生縁の深い 天性の慈眼によるものであると思った。慈眼視衆生 福寿海無量である。翁はボツリと「勘癢」を起したあとはスッキリして気持が良いといわれた。別れるに当って 若い地元の甲藤次郎教授が尋ねたことを 殊の外喜ばれたのである。

(筆者は元所員 現大同ボーリングKK)

